

『記憶の芸術』と、霧に霞む忘却の彼方で —パトリック・モディアノと2014年ノーベル文学賞の意義—

伊藤 英一*

- 1、『記憶の芸術』
- 2、モディアノの記憶とスワサンテュイタール
- 3、モディアノの記憶 ～曖昧さに秘められた思いやり～
- 4、モディアノと記憶の芸術
- 5、本の売れ行きと読了率 ～フランス書籍の2014年～
- 6、2015年とノーベル文学賞の意義を考える

ロマンシエ（小説家：romancier）と呼ばれる職名がまさ（まさ）にぴったりと当て嵌まるようなパトリック・モディアノに、2014年のノーベル文学賞が授与された。フランスにとっては、15人目⁽¹⁾（受賞を辞退したジャン＝ポール・サルトルを除けば14人目）となるノーベル文学賞の獲得となる。

だが、十数人目と少なくはない受賞者を輩出しているフランスにあっても、フランス国内の文学者あるいは小説家に贈られる賞として最も歴史と権威あるゴンクール賞を受賞した作家が、ノーベル文学賞を贈られるのは初めてである。ノーベル文学賞は1901年から、ゴンクール賞は1903年からそれぞれ授与開始され、両賞ともに百十数年にわたる歴史を誇るが、双方を贈られる作家はいなかった。フランス国内で、それなりに評価されている作家が、ノーベル文学賞を受賞することがなかったとされる一端が窺える。

ゴンクール賞を受けた作家には、1911年に受賞したアルフォンス・ド・シャトーブリアン（Alphonse de Châteaubriant）、1916年のアンリ・バルビュス（Henri Barbusse）、1918年のジョルジュ・デュアメル（Georges Duhamel）、1919年のマルセル・プルースト（Marcel Proust）、1933年のアンドレ・マルロー（André Malraux）、1938年のアンリ・トロワイヤ（Henri Troyat）、1954年のシモーヌ・ド・ボーヴォワール（Simone de Beauvoir）、1984年のマルグリット・デュラス（Marguerite Duras）、2014年のリディ・サルヴェール（Lydie Salvayre）、と錚々たるメンバーが並んでいる。

そんな中で、このゴンクール賞を1978年に受賞したモディアノが、百余人の仲間から一人抜け出して、2014年のノーベル賞を授与されたのである。ただ、今回のスウェーデン・アカデミーによる授賞発表の場で、モディアノが「現代のプルースト」⁽⁴⁾として紹介されたことは、ノーベル賞を受賞していないプルーストにとっては複雑な言葉だったのかも知れない。

しかし、モディアノの場合は、フランス語圏からドイツ語圏、スカンディナヴィア系を含むヨーロッパ大陸諸国を超えた地域では、残念ながら、殆ど知られていなかったと言えよう。彼の作品の多くが翻訳されておらず、翻訳されている場合であっても、その売れ行きが芳しいとは、とても言

えない。英語圏やアジアでは、新聞メディアもその対応に戸惑っている (Modiano prix Nobel : la presse étrangère perplexé) とフィガロ紙は報じた。⁽⁵⁾

ただし、英語圏の経済専門紙やユダヤ系メディアは、モディアノをナチやゲシュタポの暗い過去と取組んだ作家として、詳細に取上げる傾向があった。ファイナンシャル・タイムズは、「恥かしがり屋の作家が暗い過去に光を当てる (A shy writer shines a light on a dark past)」との紹介記事を掲載した。

もっとも、フランスである程度の人気があるにせよ、政財界の暴露本や煽動的で視野狭窄的な内容の出版物が圧倒的に売れる一方で、モディアノの作品の売行きは、ノーベル賞発表後の1週間程を除けば、少々、地味なものに留まっている。また、モディアノをシャンソンの作詞家、あるいは映画の脚本家としては知っていても、小説家としての彼のことを知らない人も多く、モディアノの知名度が高いとは言えない。⁽⁷⁾

むしろ、今回のノーベル経済学賞受賞者であるジャン・ティロール (Jean Tirole)⁽⁸⁾ の英文による論文や、米国で売れ行き好調のトマ・ピケティ (Thomas Piketty)⁽⁹⁾ の『21世紀における資本 (Le capital au XXI^e siècle)』⁽¹⁰⁾の方が勢いを感じさせている。

フランスの文化通信相は、モディアノの作品を一度も読んだことがないと告白しただけでなく、ここ2年ほど多忙で「仕事」以外の本を読んでいないと発言している。仕事とは、本とは、また文化とは何だろうという複雑な物議を醸し、こちらの問題の方がウェブ上では賑やかだった。少々、寂しく、侘しくもある話である。

しかし、この2014年のノーベル文学賞のインパクトは、『記憶の芸術』を高く評価することにより、人間と歴史について再考を迫るという点で、大きなものがあると考えられる。

1、『記憶の芸術』

2014年のノーベル文学賞は、「人々の最も捉え難い運命を想起させ、占領下の日常生活を明らかにした記憶の芸術のため (pour cet art de la mémoire avec lequel il a fait surgir les destins les plus insaisissables et découvrir le monde vécu sous l'Occupation. / for the art of memory with which he has evoked the most ungraspable human destinies and uncovered the life-world of the occupation)⁽¹²⁾」、パトリック・モディアノ (Patrick Modiano) に授与される旨、2014年10月9日、スウェーデン・アカデミーから発表された。⁽¹⁴⁾

ここで触れられている記憶 (la mémoire ; memory)⁽¹⁵⁾という言葉が、第二次世界大戦中の出来事にかかわる記憶についてであることは、モディアノの文学作品の大半が、ドイツ軍の占領下ないしはヴィシー政権下にあったフランスを舞台としていることから明らかであろう。しかしながら、この記憶は、静かに、個々の自身の中で反芻される、あるいは独り言のように訥々と吐露されるような類の記憶である。

モディアノの記憶は、第一次世界大戦後に記憶の義務 (Le devoir de mémoire) として語られるようになった記憶、あるいは第二次世界大戦後になって言及されることが多くなった責任 (la responsabilité ; Verantwortung)⁽¹⁶⁾を伴う記憶のように、外に向かって声高に叫ばれる記憶とは、趣が違うようだ。

そして、この違いにこそ、モディアノの創造する記憶を、記憶の芸術 (l'art de la mémoire ; the

art of memory) にまで昇華させている秘密が隠されているのではないだろうか。

モディアノ夫人であるドミニック＝ゼルフュス (Dominique Zehrfuss) の表現を借りれば、形而上的探偵 (détective métaphysique)⁽¹⁸⁾とも呼べるパトリック・モディアノが描く世界は、サブリミナルな記憶で自他あるいは過去と今とが混然一体となったような世界である。自分自身に流れる秘密めいた家族の血に戸惑いながら、生きている何かに痛みを負っているような個人が、パリの街を彷徨いつつ何かを模索する。時間的には多くの場合、ドイツ占領下の暗く淋しげな日々と、その陰から抜け切れないような後々の時が交錯し、フィクションなのか、事実なのか判別するのが難しい、混沌とした世界なのだ。

2、モディアノの記憶とスワサンテュイタール

モディアノの処女作である『エトワール広場 (La Place de l'étoile)』が、ガリマール出版から刊行されたのは1968年4月⁽¹⁹⁾で、いわゆる五月革命の直前である。

今ではシャルル・ド・ゴール広場 (La Place Charles-de-Gaulle) の地名が公称とされているが、パリの凱旋門を取り巻く広場は、1970年の改称まで、エトワール広場と呼ばれていた。星 (étoile; エトワール) のように複数の道が交差する地、すなわち『星 (エトワール) の広場』として、今も多くの人により、この広場の愛称として親しまれている。

モディアノの作品『エトワール広場 (La Place de l'étoile)』は、白血病により10歳で急逝した弟リュディ (Rudy) への献辞が記されており、続く扉に下記の逸話が掲載された後で、物語が始まる。

《Au mois de juin 1942, un officier allemand s'avance vers un jeune homme et lui dit : "Pardon, monsieur, où se trouve la place de l'Étoile ?" Le jeune homme désigne le côté gauche de sa poitrine.⁽²⁰⁾》(1942年6月、一人のドイツ軍将校が若者に近づき、「失礼ですが、エトワール広場はどこですか」と尋ねた。若者は自分の左胸を指し示した。)

この逸話、冒頭の1942年6月に意味があるのは、その6月の7日、ドイツ軍による指令が施行され、パリとその近郊に住むユダヤの人々が、ダヴィデの星を象った黄色の記章を身につけることを義務づけられたからである。そして、この話が痛々しいのは、おそらく無邪気に、あるいは軍役中しばしの観光気分的に、ドイツ軍将校が尋ねた「la place de l'Étoile」が、「エトワール広場」という地名を指すにすぎなかったのかも知れないのに、この質問を受けた青年にとっては、「星をつけたところ」と理解あるいは誤解されてしまい、その着用を検閲されたと思わせたことであろう。そして、それから一年余の間に、フランスで、その星の着用を義務付けられた人々の4分の1に相当する7万6千人が、ナチスによりブーヘンヴァルトやアウシュヴィッツ等に送られ殺戮されたことを思い起こすと、このユダヤの青年の応答は、悲しい状況をひしひしと感じさせ胸が痛む。

癒されることのない痛みと苦しみを生んだ差別がもたらす悲劇、強制収容所と集団殺戮へと導かれる悲話が、ここから語られていくのである。

ところで、著者であるモディアノは、この出版当時の1968年当時から、自らの出生年を1947年とし、フランドル (フラマン) 系の母とイタリア・ユダヤ系の父の下に、ブローニュ＝ビランクール (Boulogne-Billancourt) で誕生した、と記していた。後に、正しくは1945年であると修正されるのであるが、当時、2年分若く記していた理由は、明らかにされているような、いないような状

態である。本人は、当初身分証明書に記されていた1945年7月30日を、パリで夜歩きをするため、警察の誰何に備えて5を3に変えることにより、成人と見做されるようにしていたが、後に当初の5に戻そうとしたけれど上手く行かず、7にして1947年としたのだと、おまじないを唱えるような説明をしている。⁽²²⁾ただ、献辞をささげた亡き弟の生まれ年を記したというのが穏当な推測ではあろう。

ただ、この2年間のサバをどう読むかは、モディアノ作品を解説する上で、案外、重要なのかも知れない。現在はパリ第3 - 新ソルボンヌ大学 (Université Sorbonne Nouvelle - Paris 3) で比較・フランス文学を講じているブリュノ・ブランクマン (Bruno Blanckeman) 教授がレンヌ第2大学に在勤当時に著した『パトリック・モディアノを読む (Lire Patrick Modiano)⁽²³⁾』と題する190ページにのぼるエッセイでは、この問題を解説することから、口火を切っている。

1968年の5月から6月にかけては、フランスのナンテール校で火がついた五月革命 (Mai 68) の嵐が吹き荒れた時である。第二次世界大戦がヨーロッパに限れば収束した1945年前後に生を受けた者が大学の上級生程度に、あるいは学生としてリーダーシップを取ってもおかしくはない頃となる。フランスでは、当時の世代、特に学生だった世代をスワサンテュイタール (soixante-huitard) と呼んだりしている。学生運動に参加しているか、反対しているか、違った生き方をしているか、等々のいずれかを問わず、大戦後の荒廃と窮乏の中で誕生し、しかし新しい平和な時代を目指し、戦時中の非人間的な日々への反省を共感しながら育った世代である。

1945年と1947年との違いが、その当時にあっては、心理的には想像以上に大きなものがあったのではないと思われる。

1945年生まれだが、バカロレアに合格後、パリ大学に登録しただけで、一般学生とは距離を置き、五月革命時にあっては、バリケードの中にいたとは言え、ヴォーグ誌の記者としてであったモディアノである。⁽²⁵⁾2年間という年月を、ずらすことにより時間的距離を設けた意味は、探究に値するであろう。

また、1945年生まれであれ、1947年の生まれであれ、モディアノが描く戦時下の状況、特に今般のノーベル文学賞の授賞理由となった「占領下の日常生活 (le monde de l'Occupation ; the life-world of the occupation)」を、体感できる世代ではないのは確かなのだ。

しかし、モディアノが描く世界が全くのフィクションと言うわけではない。逆に、フィクションを徹底的に排除したような作品もある。⁽²⁶⁾いずれにせよ、そこで描かれる痛切な記憶は、リアルな記憶となっただけとはいけないうのだというメッセージが込められているようにも受け取れる。

モディアノは1970年に、フランスの建築家ベルナール・ルイ・ゼルフュス (Bernard Louis Zehrfuss) の娘であるドミニク・ゼルフュス (Dominique Zehrfuss) と結婚している。その際の、保証人がレモン・クノー (Raymond Queneau) とアンドレ・マルロー (André Malraux)⁽²⁷⁾ である。マルローはゼルフュス側の知人として出席したその結婚式で、モディアノとかなり激しい口論⁽²⁸⁾ になってしまったと伝えられている。

3. モディアノの記憶 ～曖昧さに秘められた思いやり～

モディアノへのノーベル賞授賞理由に、占領下の記憶が挙げられており、彼の作品の大半が占領下のユダヤにかかわるテーマを扱っている。

しかし、ここでは、その戦時占領下のユダヤというテーマ以外に、モディアノが大切と考えていることを探してみたい。

モディアノの唯一の子供向け作品である『カトリーヌ・セルティチュード (Catherine Certitude)』を読んでみよう。挿絵は、ニューヨーカー誌の表紙や、『わんぱくニコラ (Le petit Nicolas)』で著名なサンペ (Sempé) が担当しており、背景は現代に近い時期で、なかなかの佳品となっている。

お母さんの経営するバレエ学校の片腕として、今ではニューヨークのマンハッタンで活躍する女性カトリーヌが、幼少時、お父さんと一緒に二人、パリの片隅で生活していた頃の記憶をたどるお話である。

カトリーヌは目が余り良く見えないので、普段はメガネをかけています。けれど、バレエを練習する時や、ふかふかの枕にほおずりしながら眠りに入る時は、メガネを外さなければいけません。輪郭のぼんやりとした、ふんわりとした、メガネをしていない時が、カトリーヌは大好きです。

《Avec mes lunettes, je voyais le monde tel qu'il est. Je ne pouvais plus rêver. (メガネをかけると、そのままの世界が見えます。そうすると、夢を見られなくなってしまうのです)》

そんなカトリーヌに、お父さんもお父さん自身が若かった時と同じだと賛成してくれます。

《Tu as raison, a dit papa. Ce sera comme moi quand j'étais jeune... Les autres te trouveront dans le regard, quand tu ne porteras pas les lunettes, une sorte de buée et de douceur... Cela s'appelle le charme... (30) (そうだよ、とパパは言いました。パパが若かった時と同じだね。カトリーヌがメガネをかけていない時、他の人たちは、眼差しの中に霞みがかかったやさしさを見つけてくれる——それを魅力って呼ぶのだよ)》

そして、記憶していたこととの違いを言い切ったり、明瞭に見切ったりしては、いけないよ、とカトリーヌを諭したりします。

カトリーヌにバレエを指導してくれている先生が、お父さんの記憶と違うことを言っても、黙っていた方が良くカトリーヌに答えるのです。

《Il faut la laisser rêver... (31) (夢を見させておいてあげなきゃ——)》

このお話の最後は、今はニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジに住む両親の家に、娘を連れたカトリーヌが到着すると、生涯一緒と誓った筈なのに、《combine de papa (32) (パパの遣り口)》にはうんざり云々、とお母さんがお父さんを脅しているような影が窓に映っている。

以上、カトリーヌのお話の中から、いかにもモディアノらしいと思われる部分を抜粋してみた。

ノーベル賞受賞を報じたニュース解説のなかで、シャルロット・プドロウスキ (Charlotte Pudelowski) は、このカトリーヌのお話の冒頭部分を読むだけでも、モディアノとぼんやりした曖昧さ (comprendre le rapport au flou de Patrick Modiano) との関係が良く理解できると紹介している。(33)

ところで、モディアノが2年前の2012年、『夜の草 (L'Herbe des nuits)』を公刊した際に、マダム・フィガロ誌のエリザベト・カン (Elisabeth Quin) から受けたインタビューで、忘れることと愛することについて興味深い意見を述べているので付記しておこう。(34)

忘れることの効用については、「忘却は物事に夢幻的な側面をもたらす (L'oubli donne un côté

onirique aux choses)⁽³⁵⁾」と述べている。

愛することについては、決めつけることなく、とにかく愛すること、それも包括的に愛することだとして、次のように応えている。

“Aimer sans juger, je l'ai mis en pratique très tôt dans ma vie. Séparé de mes parents, j'avais une enfance bizarre... (中略) Oui, si on aime, on prend le paquet, sans juger ! (判定を下すことなく愛すること、これを人生の早い時期から実践していました。両親と離れて、奇妙な幼少時代を送っていましたから… 人は、愛したら、決めつけしないで、一纏^{ひとまと}めにして受け入れるものです!)”

また、モディアノが2001年に発表した『La Petite Bijou⁽³⁶⁾』と題する小品がある。成人になるか
ならないかの19歳ほどのうら若い女の子(テレーズ; Thérèse)が、パリ地下鉄のシャトレ駅で、
ラッシュ・アワーに、テレーズ(私)が未だ幼い頃に私のことをLa Petite Bijouと呼んでくれて
いた母親に似た女性を見かけ、あとを追う話である。Bijouとは、本来は男性名詞で宝石とか宝物
を意味し、petit(e)は小さなどか、可愛^{ことほ}いようすを形容する詞である。つまり『ちっちゃな/
かわいい宝石ちゃん』と私(テレーズ)を呼んでくれた母親、けれどテレーズが7歳の頃に失踪して
しまってモロッコで亡くなったとか風の便りに聞いている母親。そんな母親に酷似した女性を追
いながら、しばしの間であっても、冷酷で意地悪な母であっても、一緒に過ごせた少女の頃を思い出
すのである。

忘却の彼方から、忘れられない断片的な思い出が核となり徐々に霧が薄くなり、記憶が立上って
くる。今の時間においても、昔の時間においても、抛り所のないようなテレーズは、誰を責めるこ
ともなく、自殺を図る。

助けられ、覚醒した私の枕元にいてくれた看護婦さん(une infirmière)に、「追いつけなかった」
と一言。看護婦さんは私(テレーズ)に、「うまく切抜けなさい。もう一踏ん張りよ。(Débrouillez-
vous. Vous devez faire un effort.)⁽³⁷⁾」と言ってくれる。看護婦さんが立ち去った後、溢れる涙にく
れる私。この日から、私の人生が始まった(à partir de ce jour-là, c'était le début de la vie.)。

忘却の霧や霧の中から蘇る記憶が、どんなに過酷なものであっても、その記憶が自分(私)以外
の者を責めはしないし、攻撃することはないのだ。そして、そんな自分(私)自身を責めてはいけ
ないし、攻撃してはいけないのだ。責めたり、攻撃したり、記憶をいたずらに強調せず、これから
人生を始める姿は、素晴らしい。

自身の記憶そのものが鮮明であるか否かはさて置き、綴られ語られ表現される記憶の曖昧さに秘
められた思いやりが美しいのだ。

4、モディアノと記憶の芸術

2014年12月7日、ストックホルムでモディアノによるノーベル賞受賞講演⁽³⁸⁾が行われた。人前
で、特に公の席で、弁舌をふるうことが殆どなかったモディアノが、訥々と、また時として間違え
ながらも、38分程かけて原稿を読み終えたことは、参加者やフランスのメディアからは好意的に
迎えられたよう⁽³⁹⁾だ。

文筆家、少なくとも小説家(un écrivain – ou tout au moins un romancier)は、時として話下⁽⁴⁰⁾

手で、会話に加わるよりも、素知らぬ振りで聞く (Il écoute les conversations sans en avoir l'air, …) 方を選ぶ、といった話や、筆記試験は得意でも、面接は苦手といった話題が好まれたようだ。⁽⁴¹⁾ こうした傾向は、文筆家仲間の中の少なからぬ人々にとって共通する側面で、削除修正を重ねながらの話であっても人前で話ができる「夢を目覚めさせてくれた (un rêve éveillé)」と、人気作家のダヴィッド・フェンキノス (David Foerkinos)⁽⁴²⁾ は喜びのコメントを寄せている。

このノーベル賞受賞講演でモディアノは、ノーベル文学賞の授賞理由に記された、「占領下の世界を明らかにした」との部分に先ず言及し、一步、踏み込んだ形で次のように触れた。⁽⁴³⁾

Dans la déclaration qui a suivi l'annonce de ce prix Nobel, j'ai retenu la phrase suivante, qui était une allusion à la dernière guerre mondiale : «Il a dévoilé le monde de l'Occupation.» Je suis comme toutes celles et ceux nés en 1945, un enfant de la guerre, et plus précisément, puisque je suis né à Paris, un enfant qui a dû sa naissance au Paris de l'Occupation. Les personnes qui ont vécu dans ce Paris-là ont voulu très vite l'oublier, ou bien ne se souvenir que de détails quotidiens, de ceux qui donnaient l'illusion qu'après tout la vie de chaque jour n'avait pas été si différente de celle qu'ils menaient en temps normal. Un mauvais rêve et aussi un vague remords d'avoir été en quelque sorte des survivants. Et lorsque leurs enfants les interrogeaient plus tard sur cette période et sur ce Paris-là, leurs réponses étaient évasives. Ou bien ils gardaient le silence comme s'ils voulaient rayer de leur mémoire ces années sombres et nous cacher quelque chose. Mais devant les silences de nos parents, nous avons tout deviné, comme si nous l'avions vécu.

(下線筆者 後述)

Paris sous l'Occupation, une ville qui «semblait absente d'elle-même»

Ville étrange que ce Paris de l'Occupation. En apparence, la vie continuait, «comme avant» : les théâtres, les cinémas, les salles de music-hall, les restaurants étaient ouverts. On entendait des chansons à la radio. Il y avait même dans les théâtres et les cinémas beaucoup plus de monde qu'avant-guerre, comme si ces lieux étaient des abris où les gens se rassemblaient et se serraient les uns contre les autres pour se rassurer. Mais des détails insolites indiquaient que Paris n'était plus le même qu'autrefois. à cause de l'absence des voitures, c'était une ville silencieuse – un silence où l'on entendait le bruissement des arbres, le claquement de sabots des chevaux, le bruit des pas de la foule sur les boulevards et le brouhaha des voix. Dans le silence des rues et du black-out qui tombait en hiver vers cinq heures du soir et pendant lequel la moindre lumière aux fenêtres était interdite, cette ville semblait absente à elle-même – la ville «sans regard», comme disaient les occupants nazis. Les adultes et les enfants pouvaient disparaître d'un instant à l'autre, sans laisser aucune trace, et même entre amis, on se parlait à demi-mot et les conversations n'étaient jamais franches, parce qu'on sentait une menace planer dans l'air.

Dans ce Paris de mauvais rêve, où l'on risquait d'être victime d'une dénonciation et d'une rafle à la sortie d'une station de métro, des rencontres hasardeuses se faisaient

entre des personnes qui ne se seraient jamais croisées en temps de paix, des amours précaires naissent à l'ombre du couvre-feu sans que l'on soit sûr de se retrouver les jours suivants. Et c'est à la suite de ces rencontres souvent sans lendemain, et parfois de ces mauvaises rencontres, que des enfants sont nés plus tard. Voilà pourquoi le Paris de l'Occupation a toujours été pour moi comme une nuit originelle. Sans lui je ne serais jamais né. Ce Paris-là n'a cessé de me hanter et sa lumière voilée baigne parfois mes livres.

Voilà aussi la preuve qu'un écrivain est marqué d'une manière indélébile par sa date de naissance et par son temps, même s'il n'a pas participé d'une manière directe à l'action politique, même s'il donne l'impression d'être un solitaire, replié dans ce qu'on appelle «sa tour d'ivoire». Et s'il écrit des poèmes, ils sont à l'image du temps où il vit et n'auraient pas pu être écrits à une autre époque.

ここでモディアノは、1945年生れであることを明確に述べている。その年に生まれた他の人と同様に、戦争の子供として、戦争に生き残ってしまった子供として、特に占領下のパリに生を受けた者として、否応なく、その時とかかわっている、と言及した。その当時に誕生した者の特徴は、抹消できない形で際立っている。その上で、彼自身がその「象牙の塔」に独り籠りがちで、政治的活動に直接的参加はしなかったにしても、この時期に生を受けた者の辿った道と多少なりとも違ったところもあると示唆した。しかし、モディアノは、1945年生まれの共通性、いわゆるスワサンテュイタールのような時代を共有していることを婉曲ながら表現したかったのだと思われる。

また、ノーベル賞受賞講演という機会を捉えて、敢えて個人の誕生日である1945年7月30日を持ち出し、かつ占領下のパリに生まれた戦時中の子供であることを強調することには、奇異な感じを受ける向きもありえよう。厳密な歴史的時間から見れば、彼の誕生した時期、パリは既に占領期からは脱していたからである。

しかし、講演草稿の引用文中、筆者が下線を付した部分で、「暗かった年月の記憶を消し、何かを私たちに隠したいかのように、父母たちは沈黙を守っていた。この沈黙を前にして、私たち子供は、あたかも、その何かを共に生きたかのように、すべてを見抜いてしまったのだ (Ou bien ils gardaient le silence comme s'ils voulaient rayer de leur mémoire ces années sombres et nous cacher quelque chose. Mais devant les silences de nos parents, nous avons tout deviné, comme si nous l'avions vécu.)」と述べている。この言葉からも推測できるように、モディアノの記憶は、その前の世代の記憶と一緒に生き抜いたかのように共有共感し、一体化しているのである。

ダヴィッド・フェンキノス (David Foerkinos)⁽⁴⁴⁾ は、モディアノの文章で好きな部分として、『家族手帳 (Livret de famille)⁽⁴⁵⁾』の中にある、「私は20歳だったが、私の記憶は誕生前からあった。(J'avais 20 ans mais ma mémoire précédait ma naissance.)」との文章を挙げている。

モディアノがモディアノ自身の記憶として語る記憶は、継承したい、あるいは語り継がなければいけないと思っている人の記憶と、共有共感されているものなのだ。

モディアノは、書き手も、読み手も「時の空気 (l'air du temps)」を汲み取ることが重要とした。ホメロスの時代から現代・未来のネットの時代に至るまで、詩人や小説家の役割として、日常生活や俗に見える物事に潜むミステリーを解明することが、⁽⁴⁶⁾重要でありつづける。かつて永井荷風

が東京で、バルザックがパリで、消え行くもの、アイデンティティ、過ぎて行く時間をテーマに取り上げたのも、大都市の地勢と密接に関わっている⁽⁴⁷⁾。その時と場にかねてから継承されている記憶と、時の流れを彷徨いながら、散策するモディアノ自身の記憶が、それも次々と断続的で、継続的忘却から蘇る (les uns après les autres de manière discontinue, à coups d'oublis successifs) 記憶と共に綴られて行く。

今回の講演を締め括る段階で、ノーベル文学賞の授賞理由に記された「記憶の芸術」の部分について、短いながらも言及している。

そして、ここでも、「1945年生れであることで、記憶と忘却のテーマに敏感となった (Être né en 1945 《m'a rendu plus sensible aux thèmes de la mémoire et de l'oubli》)」と、再び1945年を強調している。更に、「パリが破壊され、すべての人々が消え去ってしまった後の1945年に生まれたことが (D'être né en 1945, après que des villes furent détruites et que des populations entières eurent disparu,)、自分を、おそらく同世代の人たちと同様、記憶と忘却の問題に、敏感にさせているのだろう (m'a sans doute, comme ceux de mon âge, rendu plus sensible aux thèmes de la mémoire et de l'oubli.)」と続け、その年の運命的な側面を繰り返した。

ただ、「記憶の芸術」そのものに関しては、次のような、概史的な事柄を語るのみにとどめている⁽⁴⁸⁾。

「マルセル・プルースト (Marcel Proust) が生きた19世紀は、まだ安定した社会だった。プルーストの記憶は、まるで生きた絵のように、細微に至るまで、過去を甦らせることができた。(La mémoire de Proust fait ressurgir le passé dans ses moindres détails, comme un tableau vivant.)」

「今日、記憶そのものが、かつてより不確かで、絶えず記憶喪失や忘却と戦わなければならない、との印象を抱いている。すべてを覆い尽くすこの層と大量の忘却のために、逃げ易く捉え難い人間の運命を、過去の断片や中断された足跡を辿る以外、把握できなくなっているのだ。(J'ai l'impression qu'aujourd'hui la mémoire est beaucoup moins sûre d'elle-même et qu'elle doit lutter sans cesse contre l'amnésie et contre l'oubli. À cause de cette couche, de cette masse d'oubli qui recouvre tout, on ne parvient à capter que des fragments du passé, des traces interrompues, des destinées humaines fuyantes et presque insaisissables.)」

「しかし、大海に漂う氷山のように、半ば消えかかった言葉を甦らせることが、忘却の大きな白紙を前にした小説家の天職なのでしょう。(Mais c'est sans doute la vocation du romancier, devant cette grande page blanche de l'oubli, de faire ressurgir quelques mots à moitié effacés, comme ces icebergs perdus qui dérivent à la surface de l'océan.)」

ただし、この講演では触れられていないところに、モディアノの「記憶の芸術」の精髓が隠されているとも考えられる。なぜならば、モディアノの特徴的なところの一つ、記憶の主体、語り手、記憶の時と脈絡等を複雑に絡み合わせ、霧の中に記憶を包み込んで、あるいは霧とか霏の中にフィクションと事実の境界を流し込むことによって、秘密の世界を言葉半ばのまま昇華させるところにこそ、「記憶の芸術」とされる所以があるのかも知れないからである。

モディアノは、思い考え記憶していることや、語ることを家庭的に自制し、また社会的にも憚ら

れた時代に育ち、1968年前後にあっても自らの象牙の塔に籠る傾向があった。ただ、その傾向が、語ることを凶器にしてはいけない、他の人々を傷つけてはいけないという、「記憶の芸術」の一つの側面を形成したと考えられる。

第二次世界大戦終結後も、しばらくの間は、占領下に置かれた年月は、少なからぬ人々にとって、忘れてしまいたい、消し去ってしまいたい時期でもあったものと思われる。アウシュヴィッツの悲惨な経験の後では、記憶を胸に秘めて、沈黙を選ばざるを得なかった人も多かったのだろう。

一方で、「収容所の世界は、確かに途方もない恐怖を秘めている。(L'univers concentrationnaire recèle, certes, une horreur exceptionnelle.)」⁽⁴⁹⁾そして、「ここでは、かつて無い程、必要なコミュニケーションが難しく、だからこそ、かつて以上に、芸術が義務なのだ。(Plus que jamais, ici, la communication nécessaire est difficile, plus que jamais, en conséquence, l'art est une obligation.)」と述べたダヴィッド・ルセ (David Rousset) のような人もいる。彼は、既に1946年、『収容所の世界 (L'Univers concentrationnaire)』⁽⁵⁰⁾を著わしている。

また、アンリ・ミッシェル (Henri Michel) のように、歴史的な記憶を保全するために働き続けた人々もいる。彼は、ヒットラー総統が1941年12月7日に下した命令『夜と霧 (Nacht-und-Nebel-Erlass)』が招来した悲惨さを描いた記録映画『夜と霧 (Nuit et brouillard)』の制作を企画し、その監督をアラン・レネ (Alain Resnais) に依頼している。しかし、悲惨な事実を直視することは、戦後10年程の1955年頃となってもなお困難な面があったことは、この映画を巡っての Cannes 映画祭での動きを思い起こすだけでも推察できる。

モディアノ⁽⁵¹⁾は、小説というメディアを用いて、占領下の一人の命の辿らざるを得なかった運命を、読者をして、あたかも自分自身がその運命を体験しているかのように共有させようとしているのかも知れない。これは疑似体験というよりも、さらに深いところを体感させる義務を果たすための芸術を目指しているとも考えられる。⁽⁵²⁾

モディアノは、悲惨な体験を経た後の世界で、沈黙する人と、語る人との橋渡しをしているのだ。

5、本の売れ行きと読了率 ～フランス書籍の2014年～

2014年は、フランスの出版業界にとっては豊作の年となったようだ。

2013年9月に刊行された、トマ・ピケティ (Thomas Piketty) の『21世紀における資本 (Le capital au XXIe siècle)』⁽⁵³⁾が、フランス語版で973ページに上る専門書であるにもかかわらず、2014年半ばには米国で45万部が売れたことも関心を引き、フランスでも同時期に15万部を達成し、話題となった。⁽⁵⁴⁾

2014年の夏休みも終わりに近づいた9月に、事実上の前ファースト・レディで、パリ・マッチ誌の編集者・記者としても名を馳せていたヴァレリー・トリールヴァイレル (Valérie Trierweiler) が、フランスの現大統領との内幕を描いた『この瞬間をありがとう (Merci pour ce moment)』⁽⁵⁵⁾と題する本がアレーヌ社から出版されると、以来2014年末まで、ノーベル文学賞が発表された翌旬である10月10日から19日までの中旬のみモディアノに第1位を譲ったものの、10月末まで、一貫して売上部数第1位を守り続けた。書店での店頭売上げの32万1140部⁽⁵⁶⁾を含め、3か月で出版社の発表では73万部⁽⁵⁷⁾を超えたとも言われている。

2014年10月になると、ベルベル出自ユダヤ系 (juif d'origine berbère)⁽⁵⁸⁾ と自称するフィガロ紙の元記者エリック・ゼムール (Éric Zemmour) が、ヴィシー政権のユダヤ人政策擁護⁽⁵⁹⁾、フェミニズム批判、のような内容を含む『フランスの自殺 (Le Suicide français)⁽⁶⁰⁾』がアルバン・ミッシェル社から刊行されると、エリック・ゼムール自身がテレビで顔が売れていることもあり、深夜の討論テレビ番組等でノーベル文学賞あるいは経済学賞の発表を凌駕する話題となり、売り上げも40万部を超えたと伝えられた⁽⁶¹⁾。

モディアノは、新作である『街角で迷子にならないために (Pour que tu ne te perdes pas dans le quartier)⁽⁶²⁾』が、ノーベル賞発表の1週間程前の2014年10月2日というタイミングで、ガリマール社から出版されたが、29万2千部、店頭売上げでは17万6849部の売上げとなっている⁽⁶³⁾。従来モディアノ作品の売上げと比べると、3倍から数倍に近いものとなっているが、内容的には芳しい評価は得られていない。今回の授賞で一般的関心も高まっていることは考えられ、既に刊行された作品の売上増への期待は大きい⁽⁶⁴⁾が、大衆に受け入れられるかについては疑問符がついている。

2014年11月に入って、ゴンクール賞がリディ・サルヴェール (Lydie Salvayre) の『泣かないで (Pas pleurer)⁽⁶⁴⁾』と発表されるや、スペイン戦争を描いた作品で初版は2万5千部であったにもかかわらず、11月第2週と第3週の売上第1位となり、増刷を重ね、45万部を超す勢いとなっている。

ところで、これらの売り上げられた本、言い換えれば購入された本は、どこまで読まれているのだろうか。

日本の楽天が2011年11月に買収した⁽⁶⁵⁾、電子書籍の専門企業として有力なカナダ系企業のコボ (Kobo) 社が、ベスト・セラー上位100書を取上げ、それらの書籍購入者の内、最後のページまで読了した人の率として読了率 (taux d'achèvement de lecture) を発表しているが、そこで示される数値がマスコミの関心を集めている⁽⁶⁶⁾。

この数値を見ると、ヴァレリー・トリールヴァイレール (Valérie Trierweiler) の『この瞬間をありがとう (Merci pour ce moment)』は70%となっており、300余ページの著作でありながら、最後まで読み終えさせる何かがあることを示している。また、フランス・アマゾン上の購読者評価は、2015年1月5日現在、1124名による評価 (évaluations) の中で、434名が5点満点の評価を寄せ、平均では約3.5点となっている。

モディアノの新作、『街角で迷子にならないために (Pour que tu ne te perdes pas dans le quartier)』は、小品であるにもかかわらず、読了率は (le taux d'achèvement) は44%にとどまっている。ル・モンド紙をはじめとして、この新作の評価は芳しいものとは言い難く、ウェブ上で見受けられる読書評と一致する、ないしは近似する点が見出され、興味深い。ちなみに、フランス・アマゾン上の購読者評価は計62人に過ぎず、満点評価から最低点まで、すべての段階にほぼ同数の評価が散らばっており、平均値は5点満点中3程度となっている。

エリック・ゼムール (Éric Zemmour) の『フランスの自殺 (Le Suicide français)』の評価は、かなり難しそうだ。読了率は、7.3%と極端に低い数値であるにも関わらず、フランス・アマゾン上の購読者評価は450名中300名が5点満点で、平均5点中4.2点を獲得している。これは、同書の判型も大きく、550ページ弱の大著で、かつ内容的には「政治的には正しくない (politiquement incorrect)」とされる問題に切り込んでおり、読み切るのは至難だが、損をしたような気にはさせ

ていないのかも知れない。

トマ・ピケティ (Thomas Piketty) の『"Le capital au XXI^e siècle" (21世紀における資本)』も、読了率は9.7%と低い数値となっているが、1000ページに届くまでに残すところ27ページだけの専門書にしては、かなり読者を魅了しているとも言えそうである。⁽⁶⁷⁾

なお、コボ (Kobo) 社の発表したフランスの書籍ベスト・セラー上位100書中での読了率最高は85.1%で、エドゥアール・ルイ (Edouard Louis) の『エディ・ベルグルと結着を (En finir avec Eddy Bellegueule)』であった。これに次いで、グレゴワール・ドラクール (Grégoire Delacourt) の『私の望み一覧表 (La liste de mes envies)』による83.9%が第2位の数値となっている。

フランスは、従来から、本の好きな人々も多く、良質な上級紙と装丁による限定版から、簡易なポケット版まで、同じ内容の本でも、多様な印刷、用紙や製本を楽しんできた。そこでは、比較的、メディアの取上げる書評、発表される賞が、少なからぬ影響を与えてきた。

電子版の書籍も普及してきた今、書評や賞の効果もさることながら、ウェブ上を流れる意見や、数値が、影響を与えるようになってきている。

モディアノによる新作を例に見ても、2014年10月2日に刊行され、それを受けての多くの批評家による低い評価が数日続いた中で、10月9日のノーベル賞発表、翌日から一週間程度の瞬間風速的な売上第1位と在庫切れが続出⁽⁶⁹⁾、そしてウェブ上を飛び交う様々な意見、短編ながら低い読了率、云々と、時代は大きく変化しつつあることを感じさせる。

6、2015年とノーベル文学賞の意義を考える

2015年は第二次世界大戦終結の70周年となる年で、人間に例えれば古稀を越える^{よわい}年齢である。日本は、この第二次世界大戦を最後まで戦った国でもあり、ヨーロッパよりも長く戦い抜いた分だけ更に集中して、この2015年の年に70周年を振り返る意義は大きいと考えられる。

ところで、ヨーロッパにおいては、2014年が第一次世界大戦開戦100周年にあたり、同じくしてノルマンディー上陸作戦に代表されるような第二次世界大戦のヨーロッパでの連合軍による実質的反攻勝利70周年を迎え、またル・モンド紙創刊 (1942年から休刊中で対独協力を批判されていたル・タンを廃刊) 70周年からもうかがえるようにマス・メディアを振り返る機会として捉えられる年ともなった。

この2014年末に行われた、パトリック・モディアノへのノーベル文学賞授賞を考察し、特にその授賞理由に述べられた「人々の捉え難い運命を想起させ、占領下の日常生活を明らかにした記憶の芸術のため」を熟読すると、そもそもアルフレッド・ノーベルが賞を創設することを願った本来の趣旨ないしは希望が忠実に反映されていることが推察される。

今日から一世紀を遡る^{さかのぼ}1915年、即ち大戦 (la Grande Guerre ; 後に第一次世界大戦と呼ばれることになる) 開戦の翌年のノーベル文学賞はロマン・ロラン (Romain Rolland) に授与されている。しかし、独仏両国の融和を願い、戦闘の即時停止を訴えていたロマン・ロランのノーベル賞受賞は、祖国フランスからは歓迎されず、滞在していたスイスに留まることを余儀なくされたのである。

個人的な話になってしまうが、筆者が1966年前後に熱中して読み耽ったのがロマン・ロランの

作品だった。最も感激しながら熟読・再読・再再読したのが『ジャン＝クリストフ (Jean-Christophe)⁽⁷⁰⁾』であり、愛読したのが『ピエールとリュース (Pierre et Luce)⁽⁷¹⁾』や『ベートーヴェンの生涯 (Vie de Beethoven)⁽⁷²⁾』である。

しかし、その感激ぶりを、同級生であるフランスの友人に話すと、反応は決まって冷淡な、なかば軽蔑したようなものだった。がっかりしながらも、その情けなさを綴ってロマン・ロランの未亡人、マリー (Madame Marie Romain Rolland) に手紙を出した。それが、ヴェズレイの丘の中腹にあるロマン・ロラン旧宅で、当時、既に形式上はパリ大学の付属施設となっていたジャン＝クリストフ・センター (Centre Jean-Christophe attaché à l'Université de Paris) に招かれるきっかけとなった。ジョルジュ・フリードマン (Georges Friedmann) 先生夫妻やピエール・グラパン (Pierre Grappin) 先生夫妻を紹介していただいたのもここである。

幼いジャン＝クリストフが窓越しに見下ろす眼下を流れるライン川の音。その音が、あたかも自分も実感できるかのように共鳴してくるロマン・ロランの文章が懐かしい。そんなジャン＝クリストフが聴いたライン川の奏でる音楽は、兩岸の国がどこの国であれ、それを聴く人々に悠久の感銘を与えながら、流れ続けている。ロマン・ロランがライン川のような大河の音から描こうとしたのは、独仏両国間や世界諸国間の対立や戦闘を克服していくための奔流なのだ。

2015年の今年、ロマン・ロランのノーベル文学賞受賞100周年となる。世界の平和と協調を考え直すためにも、ロマン・ロランの作品が忘却の彼方から蘇り、愛読されることを願いたい。

モディアノの小曲 (la petite musique de Modiano) も、サブリミナルな余韻が効果的で素晴らしいが、一世紀前の大曲、大河小説に没頭するのも悪くない。

蛇足になってしまうかも知れないが、そもそもノーベル賞とは、アルフレッド・ノーベル (Alfred Nobel) の遺言により、「人類にとって最大の便益をもたらした人々に (for those who confer the greatest benefit on mankind)」贈られる賞として創設されたものである。そして、その文学賞は、「理想に向けて最も顕著な業績を挙げた (the most outstanding work in ideal direction)⁽⁷³⁾」(下線筆者)と謳われているように、理想や理念としての平和を祈っての世界感覚が必要なのだ。「理想に向けて (in ideal direction)⁽⁷⁴⁾」に含意される方向感覚を失ってはいけない。

追記；モディアノが1945年生れであるにもかかわらず、1968年当時は1947年生れと自称していたことには、当時の兵役義務 (le service militaire obligatoire) もかかわっているものと考えられる。

筆者自身は、1946年生れの日本人であり兵役義務が課せられていた訳ではなかったが、周りの同年代のフランス人が兵役あるいは其れに代わる義務遂行にかかわり、苦悶したりしながらも、その義務遂行により大きく成長する姿を見る度に、一種の気後れを感じたことを思い出す。

フランス国籍のモディアノにとっては、兵役義務の延伸期限が近づいた当時、その義務遂行を巡る葛藤と、既に義務を遂行して学業や社会に復帰して来る同世代を安閑とは見過ごせなかったと思われる。

また、この2015年早々に、トマ・ピケティがレジオン・ドヌール勲章 (la Légion d'Honneur) の受賞を拒否したが、彼の父母も、労働者への連帯感から1968年にオード県に山羊を飼うために引越しをしている。⁽⁷⁵⁾ スワサンテュイタールにとって、1968年5月の歴史的

残滓には深いものがある。

付記；本稿に置いて、人名、作品名、引用文に対し追記した訳文は、あくまでも便宜上のために筆者自身が訳出したものである。また、和文と原文との記載順序は、その文脈上の流れに従い、その順序の整合性には拘らなかった。

なお、脚注に付したウェブ等の参照日時は、特に記載の無い限り、2015年1月5日23:00 JST現在のものである。

注

- (1) アルジェリアに生を受け1957年にノーベル文学賞を受賞したアルベール・カミュ (Albert Camus)、ガドゥループ生まれで1960年に授賞したサン＝ジョン・ペルス (Saint-John Perse)、マダガスカル出身で1985年授賞のクロード・シモン (Claude Simon)、既に1998年に中国からフランスに帰化していた後の2000年にノーベル賞を受賞した高行健 (Gao Xingjian)、1964年に授賞が発表されたものの受賞を謝絶したジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre)、オック語で文学作品を発表していた1904年授賞のフレデリック・ミストラル (Frédéric Mistral) を含んでの、フランス国籍によるノーベル文学賞受賞者の総計が15名である。

http://www.liberation.fr/livres/2014/10/09/la-france-championne-du-monde-des-nobel-de-litterature_1118205

- (2) France Culture ;Le Goncourt de 1903 à 1921, l'émission du 27.07.2013 - 13:00

Le prix Goncourt est le prix littéraire français le plus ancien et considéré comme le plus prestigieux.

Évocation des origines du Prix Goncourt, de son fonctionnement et de son rôle dans la vie littéraire française depuis plus d'un siècle, passage en revue des premiers lauréats, notamment Marcel Proust en 1919 et une brève incursion dans les cuisines du restaurant Drouant.

<http://www.franceculture.fr/emission-du-cote-de-chef-drouant-le-goncourt-de-1903-a-1921-2013-07-27>

- (3) Prix Goncourt : Lydie Salvayre récompensée pour 《Pas pleurer》, LE MONDE DES LIVRES du 05.11.2014 à 12h56, par Jean Birnbaum

http://abonnes.lemonde.fr/livres/article/2014/11/05/le-goncourt-a-lydie-salvayre-pour-pas-pleurer_4518570_3260.html

http://www.lexpress.fr/culture/livre/prix-litteraire-vous-etes-la-dame-la-dame-du-goncourt_1619527.html

- (4) The New York Times ; Patrick Modiano, a Modern 'Proust,' Is Awarded Nobel in Literature, Thursday, October 9, 2014.

http://www.nytimes.com/2014/10/10/books/patrick-modiano-wins-nobel-prize-in-literature.html?_r=0

- (5) <http://www.lefigaro.fr/livres/2014/10/10/03005-20141010ARTFIG00186-modiano-prix-nobel-la-presse-etrangere-perplexe.php>

- (6) Financial Times, 2014 October 10, Patrick Modiano: A shy writer shines a light on a dark past By Anne-Sylvaine Chassany.

Nobel winner forced France to face Nazi past By Nathalie Rothschild, October 14, 2014

<http://www.thejc.com/news/world-news/124263/nobel-winner-forced-france-face-nazi-past>

- (7) Aureliano Tonet ;Modiano, ni lu ni connu, Le Monde.
http://abonnes.lemonde.fr/culture/article/2014/10/31/modiano-ni-lu-ni-connu_4516056_3246.html
- (8) <http://www.reuters.com/article/2014/10/13/us-nobel-prize-economics-idUSKCN0I20UI20141013>
- (9) <http://www.20minutes.fr/economie/1359245-20140424-comment-economiste-francais-thomas-piketty-depasse-game-of-thrones-etats-unis>
- (10) Thomas Piketty ; "Le capital au XXIe siècle", 2013, Seuil, Paris, 973pp.
<http://www.challenges.fr/economie/20140818.CHA6780/le-capital-au-xxie-siecle-faites-comme-si-vous-alliez-lu-le-best-seller-de-piketty.html>
- (11) フルール・ペルラン (Fleur Pellerin, née Kim Jong-suk : 金鍾淑)、2014年8月26日からフランスの文化通信相 (ministre de la Culture et de la Communication)。
<http://www.lefigaro.fr/politique/le-scan/couacs/2014/10/26/25005-20141026ARTFIG00126-la-ministre-de-la-culture-incapable-de-citer-le-nom-d-un-livre-de-patrick-modiano.php>
 Fleur Pellerin n'a pas lu Modiano ! Et alors ?
http://www.lepoint.fr/politique/la-ministre-de-la-culture-ne-lit-plus-depuis-deux-ans-26-10-2014-1875812_20.php
 Fleur Pellerin, ministre de la Culture, "n'a pas du tout le temps de lire", FRANCE 24-27 oct. 2014
<http://www.france24.com/fr/20141027-france-ministre-culture-livres-litterature-fleur-pellerin-canal-patrick-modiano-prix-nobel-bernard-pivot/>
- (12) Svenska Akademien Le secrétaire perpétuel ; Communiqué de presse, Le 9 octobre 2014,
 Prix Nobel de littérature pour l'année 2014, Patrick Modiano, Le prix Nobel de littérature pour l'année 2014 est attribué à l'écrivain français Patrick Modiano, 《pour cet art de la mémoire avec lequel il a fait surgir les destins les plus insaisissables et découvrir le monde vécu sous l'Occupation》 .
 Svenska Akademien The Permanent Secretary ; Press Release, 9 October 2014, The Nobel Prize in Literature 2014, Patrick Modiano, The Nobel Prize in Literature for 2014 is awarded to the French author Patrick Modiano, "for the art of memory with which he has evoked the most ungraspable human destinies and uncovered the life-world of the occupation" .
http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/2014/press.html
http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/2014/
- (13) <http://www.lesechos.fr/tech-medias/medias/0203845439000-le-francais-patrick-modiano-prix-nobel-de-litterature-1051757.php>
<http://www.bbc.com/news/entertainment-arts-29553516>
- (14) <http://www.telegraph.co.uk/culture/books/11155104/Patrick-Modiano-the-2014-Nobel-laureate-sprang-from-the-soil-of-the-French-Occupation.html>
- (15) Sébastien Ledoux, Pour une généalogie du 《devoir de mémoire》 en France, Centre Alberto Benveniste, février 2009, 9 pp.
cf. Paul Ricœur ; La mémoire, l'histoire, l'oubli, Edition de Seuil, 690pp, 2000.
- (16) Note d'information des missions diplomatiques et consulaires allemandes en France concernant la réparation des injustices commises à l'époque du national-socialisme

<http://www.allemagne.diplo.de/contentblob/3596120/Daten/2503421/04wiedergutmachungmbdatei.pdf>

- (17) cf. “L'émergence du terme 《devoir de mémoire》 dans l'espace public” , in Sébastien Ledoux, Pour une généalogie du 《devoir de mémoire》 en France, Centre Alberto Benveniste, février 2009, pp.2-4.
- (18) <http://www.franceculture.fr/emission-l-evenement-modiano-une-vie-une-oeuvre-patrick-modiano-2014-10-11>
- (19) Patrick Modiano ; La Place de l'étoile, 05-04-1968, Gallimard , Paris.
- (20) Patrick Modiano ; La place de l'Étoile, Édition originale préfacée par Jean Cau (05-04-1968) . Nouvelle édition revue et corrigée en 1985, Collection Blanche, Gallimard , Paris.
- (21) Léon Poliakov, L'Étoile jaune, Editions du Centre de documentation juive contemporaine - Paris, 1949) - L'Étoile jaune - La situation des Juifs en France sous l'Occupation - Les législations nazie et vichyssoise, Editions Grancher, 1999.
- (22) 《Très longtemps, en effet, le romancier prétendra être né le 30 juillet 1947. Or il est né en 1945. Pour expliquer, très tardivement, ce petit arrangement avec la vérité, le romancier invoquera une raison abracadabrantesque : dans sa jeunesse, il aurait falsifié son passeport pour se vieillir et ainsi pouvoir se promener la nuit dans Paris sans être arrêté par la police. Pour ce faire, il aurait transformé le "1945" de sa naissance en "1943". "Après, je l'ai refalsifié pour rétablir la date, mais il était plus facile de transformer le 3 en 7 qu'en 5", se justifiera-t-il. Donc, 1947...》

http://www.lexpress.fr/culture/livre/les-huit-secrets-de-patrick-modiano_949744.html

- (23) Bruno Blanckeman ; Lire Patrick Modiano, Armand Colin, 2009, Paris, 190pp.
- (24) 1968年当時、ピエール・グラパン (Pierre Grappin) 先生が学部長としてナンテール校の責任者の一人でもあった。筆者がロマン・ロラン夫人 (Madame Marie Romain Rolland) に招かれて参加したヴェズレイの丘の中腹にあったパリ大学ジャン・クリストフ・センター (Centre Jean-Christophe attaché à l'Université de Paris) での2週間にわたる1966年夏のセミナーでは、グラパン先生夫妻とジョルジュ・フリードマン (Georges Friedmann) 先生夫妻に、親切な教育薫陶をいただいた。夏の太陽を満喫しながら、ヨヌ川に向けて下る牧草地で、草刈鎌の使い方を教えていただいたりしたことを、懐かしく思い出す。

その後、大学教育の場で引き続いてジョルジュ・フリードマン (Georges Friedmann) 先生の労働社会学から学んだ点は大きいことは言を待たないが、ピエール・グラパン (Pierre Grappin) 先生から感じ取った二国間関係の在り方は、独仏関係だけにとどまらず、日本と隣国との関係や、世界各国の国境紛争解決のために、活用されることが重要だと確信するようになっている。

ダニエル・コーン＝バンディ (Daniel Cohn-Bendit) にしても、ピエール・グラパン (Pierre Grappin) 先生を当時の学生たちの無知から誹謗したことを振り返って、声を震わせたと伝えられている。

《Visiblement très ému, il (i.e. Daniel Cohn-Bendit) a ensuite rendu hommage à Pierre Grappin, doyen de la faculté de lettres de Nanterre en mai 1968, qui avait été traité de nazi par les étudiants révoltés.》

《En 68, il y a eu des choses admirables ici même, mais aussi des paroles qu'il faut regretter. Dans le feu de l'action, le doyen de l'époque, Pierre Grappin, ancien résistant, a été traité de nazi. Le traiter de nazi, c'était ne pas savoir ce qu'étaient les nazis》, a-t-il affirmé, la voix tremblante.》(下線部分筆者追記)

http://www.liberation.fr/politiques/2014/12/11/46-ans-apres-mai-68-daniel-cohn-bendit-obtient-son-doctorat-a-nanterre_1161893

Le Monde, 17 février 1968, page 10 : 《Daniel Cohn-Bendit a comparu devant la commission d'expulsion》

- (25) 《En 1968, âgé de 22 ans, il couvre les barricades de mai pour... Vogue !》 http://www.lexpress.fr/culture/livre/les-huit-secrets-de-patrick-modiano_949744.html
- (26) Patrick Modiano ; Dora Bruder, Gallimard, Paris, 144pp.
Annelies Schulte Nordholt ; Dora Buder : le témoignage par le biais de la fiction, in Patrick Modiano, edited by John E. Flower, Rodopi, Amsterdam & New York, pp.75-87.
- (27) マルローは『人間の条件 (La Condition humaine)』の中で、「人間とは何か？ みじめで、ちっぽけな秘密の堆積なのだ (Qu'est-ce que l'homme ? Un misérable petit tas de secrets)」と言わせている。
- (28) http://www.lexpress.fr/culture/livre/les-huit-secrets-de-patrick-modiano_949744.html
- (29) Patrick Modiano: Catherine Certitude, Gallimard Jeunesse. 1998 (1988 pour Gallimard) , Paris, p.10.
- (30) *ibid.*, p.45.
- (31) *ibid.*, p.80.
- (32) *ibid.*, p.95.
- (33) 《Ces quelques lignes, qui se trouvent au tout début de Catherine Certitude, permettent de comprendre le rapport au flou de Patrick Modiano. (Elles permettent aussi de poétiser le rapport aux lunettes et de consoler les enfants qui s'en plaignent.) Mais elles montrent aussi comment, pour voir le monde à la fois plus fou et à la fois plus vrai, l'oeuvre de Patrick Modiano peut aussi servir de lunettes.》
Charlotte Pudlowski ; La poésie du flou: voir le monde avec les lunettes de Modiano, 09.10.2014
<http://www.slate.fr/story/93143/modiano>
- (34) Elisabeth Quin ; Modiano, poète-enquêteur, le 11 novembre 2012.
<http://madame.lefigaro.fr/art-de-vivre/modiano-poete-enqueteur-111112-304356>
- (35) *ibid.* 《Q. Mais est-ce vraiment de l'imaginaire, votre matériau romanesque ?
M. Ce n'est pas vraiment de l'imaginaire, c'est une réalité revue à travers le temps, qui est mangée par l'oubli. Ce qui est obsédant, c'est l'oubli, qui donne un côté onirique aux choses ; si vous passez un vieux disque gondolé sur un pick-up, ça fera un son bizarre, c'est l'image pour moi de ce que le temps fait subir au passé. On se souvient de choses parcellaires, même les souvenirs sont bouffés, rongés... J'essaie de les retenir, les choses, les petites choses.》
- (36) Patrick Modiano ; La Petite Bijou, 13 novembre 2002, Gallimard (Folio) , Paris, 178pp.
- (37) Débrouillez-vous と、含意として、霧を晴らす意味合いが込められている。
- (38) Conférence Nobel par Patrick Modiano, Lauréat du Prix Nobel de littérature 2014, le 7 décembre 2014 17h30 heure de Stockholm, la Fondation Nobel.
http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/2014/modiano-lecture_fr.pdf
<http://www.nobelprize.org/mediaplayer/index.php?id=2418>
Verbatim : le discours de réception du prix Nobel de Patrick Modiano, Le Monde.fr, 07.12.2014
- (39) 《En douze années à l'Académie, je n'ai jamais vu un lauréat autant et aussi longuement applaudi》 ,

fait remarquer Odd Zschiedrich, directeur administratif de l'Académie suédoise.

<http://www.lefigaro.fr/livres/2014/12/08/03005-20141208ARTFIG00290-patrick-modiano-plebiscite-en-suede.php>

- (40) «Perdu dans un costume tel un jeune homme pour un premier rendez-vous amoureux...»

<http://www.lejdd.fr/Culture/Livres/David-Foenkinos-Le-Nobel-de-Modiano-un-reve-eveille-708936>

http://www.liberation.fr/culture/2014/12/30/modiano-un-conte-de-nobel_1171237

- (41) «Mais un écrivain – ou tout au moins un romancier – a souvent des rapports difficiles avec la parole. Et si l'on se rappelle cette distinction scolaire entre l'écrit et l'oral, un romancier est plus doué pour l'écrit que pour l'oral. Il a l'habitude de se taire et s'il veut se pénétrer d'une atmosphère, il doit se fondre dans la foule. Il écoute les conversations sans en avoir l'air, et s'il intervient dans celles-ci, c'est toujours pour poser quelques questions discrètes afin de mieux comprendre les femmes et les hommes qui l'entourent. Il a une parole hésitante, à cause de son habitude de raturer ses écrits. Bien sûr, après de multiples ratures, son style peut paraître limpide. Mais quand il prend la parole, il n'a plus la ressource de corriger ses hésitations.

Et puis j'appartiens à une génération où on ne laissait pas parler les enfants, sauf en certaines occasions assez rares et s'ils en demandaient la permission. Mais on ne les écoutait pas et bien souvent on leur coupait la parole. Voilà ce qui explique la difficulté d'élocution de certains d'entre nous, tantôt hésitante, tantôt trop rapide, comme s'ils craignaient à chaque instant d'être interrompus. D'où, sans doute, ce désir d'écrire qui m'a pris, comme beaucoup d'autres, au sortir de l'enfance. Vous espérez que les adultes vous liront. Ils seront obligés ainsi de vous écouter sans vous interrompre et ils sauront une fois pour toutes ce que vous avez sur le cœur.»

op. cit. (i.e. Conférence Nobel par Patrick Modiano)

- (42) David Foenkinos ; Le Nobel de Modiano, un rêve éveillé, Le Journal du Dimanche, dimanche 28 décembre 2014.

«Une parole faite de ratures

Au cœur d'une année littéraire pleine de ses combats habituels, il y eut un moment de joie unanime. Habités que nous sommes aux consécration de l'écriture engagée, ou politique, le Nobel de Modiano nous est apparu comme une sorte de rêve éveillé. Nous étions tous un peu lui, ce jour-là. Émerveillés, surpris, heureux. Quelle situation périlleuse pour un homme ayant fui le bruit des commentaires depuis toujours, dosant ses apparitions comme autant de sacrifices à sa solitude, et devant parler devant le monde entier.

Encore une fois, Modiano a été spectaculaire.»

<http://www.lejdd.fr/Culture/Livres/David-Foenkinos-Le-Nobel-de-Modiano-un-reve-eveille-708936>

- (43) *op. cit.* (i.e. Conférence Nobel par Patrick Modiano)

- (44) <http://www.lejdd.fr/Culture/Livres/David-Foenkinos-Le-Nobel-de-Modiano-un-reve-eveille-708936>

- (45) Patrick Modiano ; Livret de famille, le 25 avril 1977, Gallimard, Paris.

- (46) «J'ai toujours cru que le poète et le romancier donnaient du mystère aux êtres qui semblent submergés par la vie quotidienne, aux choses en apparence banales, – et cela à force de les observer

avec une attention soutenue et de façon presque hypnotique. Sous leur regard, la vie courante finit par s'envelopper de mystère et par prendre une sorte de phosphorescence qu'elle n'avait pas à première vue mais qui était cachée en profondeur. C'est le rôle du poète et du romancier, et du peintre aussi, de dévoiler ce mystère et cette phosphorescence qui se trouvent au fond de chaque personne. Je pense à mon cousin lointain, le peintre Amedeo Modigliani dont les toiles les plus émouvantes sont celles où il a choisi pour modèles des anonymes, des enfants et des filles des rues, des servantes, de petits paysans, de jeunes apprentis. Il les a peints d'un trait aigu qui rappelle la grande tradition toscane, celle de Botticelli et des peintres siennois du Quattrocento. Il leur a donné ainsi – ou plutôt il a dévoilé – toute la grâce et la noblesse qui étaient en eux sous leur humble apparence. Le travail du romancier doit aller dans ce sens-là. Son imagination, loin de déformer la réalité, doit la pénétrer en profondeur et révéler cette réalité à elle-même, avec la force des infrarouges et des ultraviolets pour détecter ce qui se cache derrière les apparences. Et je ne serais pas loin de croire que dans le meilleur des cas le romancier est une sorte de voyant et même de visionnaire. Et aussi un sismographe, prêt à enregistrer les mouvements les plus imperceptibles.»

op. cit. (i.e. Conférence Nobel par Patrick Modiano)

- (47) 《es thèmes de la disparition, de l'identité, du temps qui passe sont étroitement liés à la topographie des grandes villes.》

op. cit. (i.e. Conférence Nobel par Patrick Modiano)

- (48) http://abonnes.lemonde.fr/prix-nobel/article/2014/12/07/verbatim-le-discours-de-reception-du-prix-nobel-de-patrick-modiano_4536162_1772031.html
- (49) Pour une chaire de littérature concentrationnaire, LE MONDE | 23.05.1970.
http://abonnes.lemonde.fr/acces-restreint/archives/article/1970/05/23/6b6b689d696b68c592686367639a69_2667660_1819218.html
- (50) L'Univers concentrationnaire, éditions du Pavois, 1946.
- (51) Joseph JURT : La mémoire de la Shoah: Dora Bruder, *in* Patrick Modiano, edited by John E. Flower, Rodopi, New York, pp.89-108.
- (52) Patrick Modiano ; Avec Klarsfeld, contre l'oubli, Libération du 2 novembre 94.
- (53) Thomas Piketty ; "Le capital au XXIe siècle", 2013, Seuil, Paris, 973pp.
<http://www.20minutes.fr/economie/1359245-20140424-comment-economiste-francais-thomas-piketty-depasse-game-of-thrones-etats-unis>
- (54) <http://www.challenges.fr/economie/20140818.CHA6780/le-capital-au-xxie-siecle-faites-comme-si-vous-alliez-lu-le-best-seller-de-piketty.html>
- (55) Valérie Trierweiler ; Merci pour ce moment, 4 septembre 2014, Les Arènes, Paris, 320pp.
- (56) http://www.lexpress.fr/culture/livre/infographie-meilleures-ventes-de-2014-trierweiler-devant-le-prix-nobel_1631081.html
- (57) <http://www.public.fr/News/Valerie-Trierweiler-Merci-pour-ce-moment-record-des-ventes-2014-639292>
<http://www.lefigaro.fr/livres/2014/12/10/03005-20141210ARTFIG00184-valerie-trierweiler-reine-des-meilleures-ventes-de-livres-2014.php>

- (58) Éric Zemmour : “Je ne demande pas la francisation des noms”》 Article de L'Express par Laurent Martinet, publié le 11/03/2010.
http://www.lexpress.fr/culture/livre/eric-zemmour-je-ne-demande-pas-la-francisation-des-noms_854520.html
- (59) Polémique Zemmour : 《La France de Pétain est totalement associée à la solution finale contre les juifs》, LE MONDE | 18.10.2014 à 12h03
Pour Serge et Arno Klarsfeld, ce n'est pas Vichy qui a sauvé des juifs, ce sont les Eglises et les Français. Même Pierre Laval le reconnaît...
http://abonnes.lemonde.fr/politique/article/2014/10/18/la-france-de-petain-est-totalement-associee-a-la-solution-finale-contre-les-juifs_4508547_823448.html
- (60) Éric Zemmour ;Le Suicide français, octobre 2014, Albin Michel, Paris, 535pp.
- (61) フィガロ紙の報じた Ipsos/Livres Hebdo の統計によれば、2014 年 10 月第 2 週および第 3 週は連続して、売上トップはゼムールの「フランスの自殺」であり、モディアノまたはトリールヴァイレルの作品より上位だったことになる。
《Le suicide français" d'Eric Zemmour occupe pour la seconde semaine consécutive la première place du Top 20 Ipsos/Livres Hebdo des meilleures ventes》
<http://www.lefigaro.fr/flash-eco/2014/10/24/97002-20141024FILWWW00399-eric-zemmour-reste-en-tete-des-ventes.php>
- (62) Patrick Modiano ; Pour que tu ne te perdes pas dans le quartier, le 2 octobre 2014, Gallimard, Paris, 146pp.
- (63) Nombre d'exemplaires vendus selon Edistat Tite-Live
- (64) Lydie Salvayre ; Pas pleurer, 21 août 2014, Seuil, Paris, 278 pp.
- (65) 楽天株式会社 ; カナダの電子書籍事業者 Kobo 社の買収に関するお知らせ、2011 年 11 月 9 日 <http://corp.rakuten.co.jp/event/kobo/ja/>
<http://corp.rakuten.co.jp/newsrelease/2011/1109.html>
- (66) Les Français achètent Trierweiler, Zemmour et Modiano, mais les lisent-ils vraiment?
Par Victor Garcia publié le 12/12/2014, L'Express.
http://www.lexpress.fr/culture/livre/les-francais-achetent-trierweiler-zemmour-et-modiano-mais-les-lisent-ils-vraiment_1631461.html
E-books can tell which novels you didn't finish, Donna Tartt, Wednesday 10 December 2014, The Guardian.
<http://www.theguardian.com/books/2014/dec/10/kobo-survey-books-readers-finish-donna-tartt>
- (67) http://lexpansion.lexpress.fr/actualite-economique/thomas-piketty-balaie-les-critiques-du-financial-times_1546088.html
http://lexpansion.lexpress.fr/actualite-economique/piketty-accuse-d-avoir-commis-des-erreurs-par-le-financial-time_1546019.html
- (68) コボ (Kobo) 社による調査は、カナダ、米国、フランス、英国、オランダにおける 2100 万端末を対象とする実績値であるとされている。

一般的にミステリー小説は最後まで読まれる率が高いとされるが、ヨーロッパでは恋愛小説 (romans d'amour) の読了率が好成績を示していると、フランス 69.4%、英国 61.9%、オランダ 66.6%、イタリア 74.4% という数値を、レクスプレス誌は引用している。

http://www.lexpress.fr/culture/livre/les-francais-achetent-trierweiler-zemmour-et-modiano-mais-les-lisent-ils-vraiment_1631461.html

(69) http://www.rtf.be/culture/litterature/detail_classement-des-ventes-livres-valerie-trierweiler-quitte-le-classement-modiano-et-zemmour-restant-en-tete?id=8389456

(70) Romain Rolland ; Jean-Christophe, édition définitive, Albin Michel, Paris, 1961, 1610pp.
(publié en dix volumes de 1904 à 1912 aux Cahiers de la quinzaine)

(71) Romain Rolland ; Pierre et Luce, Albin Michel, Paris, 1918, 157pp.

Romain Rolland ; Peter und Lutz, eine Erzählung mit Sechzehn Holzschnitten von Frans Masereel, Büchergilde Gutenberg, Wien, 1949, 207pp.

(72) Romain Rolland ; Vie de Beethoven 1770-1827, Hachette, Paris, 1964, 176pp.

cf. Romain Rolland ; Beethoven Les grandes époques créatrices, édition définitive, Albin Michel, Paris, 1966, 1517pp.

(73) http://www.nobelprize.org/alfred_nobel/will/

(74) 《On peut s'étonner que le Prix revienne à un auteur "so frenchy", dont les romans se déroulent pour l'essentiel à Paris et qui excelle à reconstituer avec un sens compulsif du détail toute une archéologie de la France révolue. L'attribution du Nobel est aussi un geste politique, au sens large, au sens "citoyen du monde".》

Bruno Blanckeman ; Modiano et le rapport troublé à la vie, Huffington Post/Paris, 13/10/2014.

http://www.huffingtonpost.fr/bruno-blanckeman/livres-modiano-critiques-particularites_b_5972432.html

(75) 《Ses parents, issus d'un milieu très aisé, militent à LO et, à dix-neuf ans, quittent tout pour aller "élever des chèvres dans l'Aude". On est au début des années 1970. Mai 68 est passé》

Piketty dit refuser la Légion d'Honneur par principe et maintient sa critique du gouvernement Le 02.01.2015 à 10:30

<http://piketty.pse.ens.fr/files/presse/panorama/2001/LeMonde070901%283%29.htm>